夜明けは新しい日の始まり

B・R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜明けは新しい日の始まり

【Ｎコード】
Ｎ９７０３Ｅ

【作者名】
Ｂ・Ｒ

【あらすじ】
「現実はつまらない。夢の世界のほうがおもしろい」と思う主人公。現実と非現実の世界。今は、それでいいかもしれない。だが、いつまでも逃げているわけにはいかない。立ち向かわないといけないのだ。

第1章：プロローグ（前書き）

こんにちは。というよりお久しぶりです。
今まで書いていた（更新は４か月以上していない）のは、停止させ
新しいのを書くことにしました。
お待ち頂いている方々には、申し訳ありません。
今の僕には、あの話を完結まで持っていく力はありません。
この作品を書いて、自分に力を自信をつけたいです。

それでは、新たな物語の始まりです。

第1章：プロローグ

―何かが見える…。
―それが何かは分からない。だが、それは、とても暖かくて楽しいということは分かる。
―誰かが呼んでいる。それが誰かは分からない。なぜ分からない？
―――――――――――

「……夢か。何だか分からない夢だったな。」
俺は、目覚ましアラーム兼携帯電話を枕元からとり、ボタンを押した。
「まだ、こんな時間か。起きるには早すぎるよな…。…2度寝しよう。」
時刻は、深夜3時である。もう少し経てば朝刊がくる時間だ。
新聞の配達の人は大変だなと思いつつ、俺は再び枕に頭を預けた。

現実が日頃から面白くない俺にとって、夢で起こることはいつのまにか楽しみにしていた。
夢なら、何が起きても可笑しくないし、ありえないことが起きるから飽きない。
楽しい夢もあれば、辛いことや悲しい夢ある。だから全部ひっくるめて俺は夢が好きである。

「見るとしたらさっき見た分からない夢がいいな。」
俺は、そう思いつつ睡魔に体を預け、無意識下へ入って行った…。

「シュウ――――！起きなさい！！」
俺の名前が母さんに呼ばれていた。
「なんだよ…．全く。２度寝したのに眠気が取れていないな」
俺は携帯のディスプレイに表示される時計を見た。
…８時。これは明らかに危険ゾーンを超え未知な世界への階段に光を照らし始め…
「…って！んなもん考えているヒマなんてないんだったー！！」
自分でボケツッコミしているなんて、俺は馬鹿かー！！
超特急…そう、それはエクスプレスのように着替えていった。ものの１分で制服に着替えた。

ダッシュで朝ごはんをたいらげ、身嗜みを整えて、またダッシュで玄関から出ていった―

親がシュウと呼んだ俺の名前は略されている。
俺の名前は、修一。光坂修一（こうさかしゅういち）という名前だ。名前から察するに一人っ子だ。妹や弟が欲しいと考えたことはあるが…ま、両親が作る気ないなら仕方ないな（それなりの歳だしな）。

俺は、そんなこと考えながら学校への道を全速力で駆けていった。
学校には危機一発で間に合い、先生が来ると行われる朝のホームルームには参加出来た。
３学期も終了直前であり、出席日数が足りている奴は余裕で遅刻してくるのがいた。
俺は、そうゆう駄目人間みたいなことしないことを心の中で考えていた。

「間に合った…。これで宿題の提出があったら終わりだな」と考えた。
だが、神は今日の俺にまた試練を与えたのであった…。

「今日は重役出勤か？修一。お前がそんなダラシナイ奴とは俺は思っていなかったぜ。」
「なんだ、トオルか。お前こそ［おはよう］のひとつも言えないのか。」
「ああ、おはよう。修一社長！！」
「今更、言ってもな…」
「イチイチ挨拶のこと気にしていたら、キリがないぜ」
「そうなんだけど、やっぱり…ほら！　挨拶したほうが気持ちはいいだろ？」
「そうか。じゃ、これからは挨拶をすることにする」

この人間社会で大切なことである挨拶もできないのは、松崎徹（まつざき とおる）である。
俺は、トオルと呼び、トオルも俺のこと修一と呼ぶ仲だ。信頼でき、一番仲良しである友人。いや親友と呼んでもいいと俺は思っている。
昔の俺は友人のことは、全然気にせず過ごしていたが、何かのキッカケで大切するようにしたんだ。いつもなら思い出せるのに、今回に限って思い出せない…なんでだろう？

そういうこと考えている間にもトオルは俺に話しかけていた。
「それにしても、3学期終了直前に作文の宿題とは…先生やってくれるよ」

え？　しゅくだい？？　そんなのあった？？？

「ああ。1年間過ごして自分が変わった部分とか感想を書いてくる宿題だよ。もしかして修一…。お前忘れたのか？」

うおおおおおおおおおおお――――――今日に限ってこれはないだろう！！

俺は、急いで鞄の中に入っていたファイルから原稿用紙と取り出し、急ピッチで書いていった。トオルは、黙って見ていた。幸いにも提出は帰りのホームルームである事と原稿用紙の制限がなかった事と1限目の授業が自習であった事の3つの運に恵まれて、俺は2枚を30分で書き上げたのであった。

トオルは「なに！もう書いたのか！？」と驚いていた。

神からの試練というより、不運が重なりすぎだと俺は思った。

自習の授業は結構あり、あっという間に放課後になった。この時期になると先生達も授業するのが面倒だと思った。同じ人間だということで分かるが、そんなのでいいのか？と言ってしまいそうなるが、授業がラクになるならイイやと思ってしまう俺も駄目だな。

下校になりトオルと一緒に帰る事にした。

「どっか寄り道するか？」とトオルが誘ってきた。夕飯まで時間があるから良いが…

「ん～トオルは、どこかに行きたい希望とかある？」

「無い！」

即答かよっ！！

「無いのなら、別に寄り道しなくてもいいだろう？それに持ち合わせあるのか？」

「無い！！」

また即答かっ！

「だから、修一の奢りで遊ぼうぜ？」

「生憎だが、俺も奢れるほどの持ち合わせは無い！」

トオルは良いやつなんだけど、部分的にアホなんだよな…。

――その後、トオルは粘ったが俺の財布の中身を見たら、この話が無かったことになった。

残り1週間で学校は終了だが、それは「光陰の矢の如し」のように去っていった…。

短い春休みが終わり、新たな学年がスタートした。

春が訪れれば、気分が高揚しウキウキ気分になると思っていたが
この春はそれがなく、妙なざわつきを感じ、いつもと違う春の感覚に襲われた。
それに時間の経ち方も早い気がする。休みだったからか？？？

これから先、何かが起きると感じつつ、俺はクリーニングに出していた制服を着て、朝の行事をこなし、新たなスタートを切って学校へ向かった――。

第1章：プロローグ（後書き）

実は今までかな入力で文を打っていたのですが、ある事でローマ字入力に変えるになりました。
変えるのに大変でしたが、今は普通に打てるようになっています。

これから長いお付き合いになると思いますが、よろしくお願いします。

第2章：桜の季節（前書き）

この章から女の子が出てきます。
ちなみに出てくる女の子には元になった子がいます。

※桜の季節ですが、一言も桜に関する言葉は出てきません。

第2章：桜の季節

「始業式から遅刻は、ありえないよな」
以前の教訓にし、俺は余裕が出るほどの時間に家を出た。
さて、新学年になり新しいクラス編制が張り出されている掲示板に行くか…。

俺は、目的の場所へあまり意識もせず足を向けていた。

「やっぱり、人いっぱいいるよな…誰だって自分の新しいクラスがどこか早く確かめたいよな。」
俺は、人を押し退けて見るか、それとも人が少し退くのが待つか悩んでいた。
視合わした感じだと、トオルは―――いないな…こういうのには、早く知りたそうで敏感そうなのにな…。

人混みの中に一生懸命背伸びをして掲示板を見ようとする子に目が止まった。
長い黒髪が砂浜に打ち寄せる海の波のようにゆっくりとなびいている。

「あの中に割り込むのは、無理だな。」
今の掲示板の周りいるのは、野郎　男ばかりだ。
あの女の子とは、体格差が違いすぎるから、どうなるか目に見えている。
「困っているそうだし、助けてあげよう。」
俺は、その子に向かって歩き出した。
―――待て。俺はそんなことが出来たことがあったのか。

――記憶の中で、違う自分が話しかけているようだった。
それを聞いた時、一瞬踏み出す足を止めたが気にせず、再び歩き出した―。
「あの、すいません。」
「――――――」
背伸びすることと掲示板を見たいことに集中していて聞こえていなそうだった。
「あの～すいません。僕が見てきましょうか？」
今度は、分かってもらえるように肩に触れて揺すった。
「―！？…なんでしょうか？」
今度は気づいてもらえた。でも、要件が聞こえていなかったようだな。
「掲示板が見えないなら、僕が見てきましょうか？」
「えっ！？…いいのですか？」
素直そうに答えてくれて良かった。
ここで、もし…「なにアンタ？気安く話しかけないでよ」と言われたら、ショックだよな…。
「ええ。俺もまだ見ていないしね。それにこういうのは早く知りたいでしょ？」
「はい。それじゃよろしくお願いします。」
律義に頭を下げられた。
「頭を下げるほどのことではないと思うけど…頼まれたのだからし

っかりしないと」
俺は、野郎が沢山いる掲示板に向かって行ったが、あることに気がついた
「名前が分からない…。」
重要なことを聞き忘れていた。俺はあの子の名前が分からない。
「今から聞きに戻るのも、なんだか嫌だよな…」
でも、このまま名前が分からないままより良いと思うから――――戻ろう。

「はぁ～…俺、なにやっているんだよ…アホか」
俺は、気が重いまま女の子の元へ戻った。

「ごめん。行く前に名前を聞くのを忘れていた。」
俺は、軽く顔を伏せながら名前を知らない女の子に聞いた。
「――――そうでしたね。私も言うのを忘れていました。てっきり知っているかと思いました。」
あれ？俺とこの子面識があるのかな？――――俺には、憶えがないな…。
「私の名前は桜川（さくらがわ）　陽（ひなた）です。」
桜川…ね…うーん…悪いけど聞いたことがあるようで無いような感じだな。
「えっと…桜川　陽…さんですね。俺は光坂修一。それじゃ、桜川さんもう一度行ってきます。」
「よろしくお願いします。光坂さん。」

うーん…あの受け取り方は俺のことを知っている感じだな。
もしかしたら、トオルに聞けば何か分かるかもしれない。
俺は考えながら、再び掲示板の方へ向かった。

さっきより若干、人は減ったがそれでも混雑はしている。
「こんな状況になるなら解決策作れよ。先生や生徒会の人のやつら」
ブツブツ言いながら、俺は人ゴミ集団へ突入していった――――。
激戦（罵声や殴る蹴る行為の連発）だった。相手が男だから容赦なかった。
「俺と同じAクラスだったとはな…偶然が重なるもんだな。」
この学校はアルファベットによるクラス編制で、だいたいA～Eまである。

桜川さんのもとへ俺は行き「Aクラスだったよ、どうでもいいけど俺もAクラスだから一緒ですよ。」
ホントどうでもいいことだな…。
「そうなんですか、わざわざ見に行ってくれてありがとうございます。」
桜川さんは、ほんわかとした笑顔で言ってくれて、俺も心が和んだ。
「どういたしまして。困ったことがあったらお互い様ですからね。」
俺がそう言うと彼女は用事があると、その場から去って行った。

しばらく経った後、トオルがやってきた。
「よう。おはよう修一。俺のクラス分かるか？」
新学期からこんな調子かよ…トオルらしいけどな。
「いや確認していない。自分の目で新しいクラスを確認するのも一つの楽しみだと俺は思っているからな。」
「そうだな、それじゃ掲示板を見に行ってくる。」
トオルが戻って来た時、どんな表情や声を出すかな。
数分後…
トオルはニコニコ顔で戻ってきた。

その顔から察するに結果が良かったそうだ。しかも…
「ラッキー！また修一と一緒のクラスだ！また一年間よろしく！」
というわけだ。2年生になってもトオルと一緒のクラスになった。

「――トオルに聞くことがあったんだ。」
「なんだ、修一？」
2年の教室に向かっている途中で俺は、朝のことを話した。
「で、話に出てきた桜川さんって分かる？」
「何言っているんだよ。1年の時クラスメートだっただろ。」
そうだった？
「そうだよ。修一が覚えていないとはな…」
トオルはそう言っているが、本当にそうだろうか。
俺の記憶には、本当に身に憶えがない――なんだ？この違和感は？
――ど忘れかもしれないな。以前に短期・長期休暇が終わり、学校が始まると時々、人の名前が思え出せないことがあったから、今回の桜川さんが憶えだせないのも一緒だな。

教室に入ると桜川さんが自分の席なのだろうか…一人でポッツリ座っている。
―寂しい雰囲気・静か・影が薄い。俺は、その姿を見てそのようなことを感じた。
なんだか、見ていられなくなった俺は、彼女に話しかけていた

「朝はどうも。用事はもう済んだの？」
「え！？　あ、はい。」
「そうか。そうそう俺の隣にいるのは――」
「松崎くん。光坂くんはトオルと呼んでいる人でしょ？」
「…あぁ、そうだよ。」

「今年もよろしくね。光坂くんに松崎くん。」
「こちらこそ。」
「俺もだぜ！桜川！」

俺達を知っているということはトオルの言うとおり一緒のクラスだったんだな。
今は憶えだせないが、一緒に過ごしてゆくうちに憶えだしてゆくだろうな。

その後、教室には同じクラスや違うクラスの人達がやってきて、少し経ったら担任の先生も来たから俺達との会話は終了した。

この新クラスでの1年は、天国か地獄か…。それが分かるようになるには、時間がかかりそうだ。

第2章：桜の季節（後書き）

今回は1週間で次話投稿ですが、今後先は分かりません。

これは、私の頑張り次第です。

最後に、読んでくれてありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9703e/

夜明けは新しい日の始まり

2010年11月14日09時39分発行